

第22回ビジネス日本語研究会

プログラム共有の為のテンプレートを探る

主宰：ビジネス日本語研究会

協力：言語教育プログラム研究会

開催趣旨

日本語の教師やコース管理者の間のみならず、企業の人事担当者も含めプログラムに関わる全員がその全体像を共有し、プログラムの目標達成のためのコミュニケーションに利用できるツールがほしい。

言語教育プログラム研究会のご協力のもとに、その可能性を探ります。

本日の流れ

- 1:30-1:50 《挨拶》 ビジネス日本語研究会
公益財団法人 日本漢字能力検定協会
- 1:50-2:30 《講演》 プログラム可視化テンプレートについて
プログラム研究会
- 2:30-2:50 《発表》 記入事例より 「企業研修の場合」
ビジネス日本語研究会
- 2:50-3:20 《グループワーク》
..... 休憩（20分）
- 3:40-4:10 《グループワーク》
ビジネス日本語教育プログラムにおける「テンプレート」
の必要性とカスタマイズの可能性の検討
- 4:10-4:40 討議結果の全体共有
- 4:40-5:00 《総括》

記入事例から 「企業研修の場合」

問題意識:

日本語の教師やコース管理者の間のみならず、企業の人事担当者も含めたプログラムに関わる全員がその全体像を共有し、プログラムの目標達成のためのコミュニケーションに利用できる ツール*とするために…

*対話ツール、課題解決ツール (徳永ほか 2016)

テンプレートの課題

「自分の関わる日本語教育プログラム像を描いてみよう」
(2016年『日本語教育実践研究フォーラム報告』) より

- 課題 1 : 自身が関わる日本語教育プログラムについて記述することが、そのプログラムの使命や構成を認識し、自身の日本語教育活動を見直す視点の獲得につながるのか。
- 課題 2 : 可視化テンプレートは日本語教育現場のどのような目的や機会に活用できるか。
- 課題 3 : 可視化テンプレートはどのように改善できるか

やってみたこと

- ① 日本語教育機関の企業研修プログラムのコーディネーター担当者に実施事例をプログラム可視化テンプレート（以下、テンプレート）に記入してもらった。
- ② 記入者に以下2点についてインタビューをした。
 - ・ 記入した事例プログラムの課題
 - ・ 課題解決にテンプレート記入は有効か
- ③ 上記②をもとに、テンプレートについて、ツールとしてのとしての活用方法、改善点について検討した。

②インタビューの結果

●記入した記入事例の課題

- ・関係者間での研修方法、内容、成果の共有に課題があると感じる。（捉え方、評価の尺度が異なる等）

理由：

関係者が多く、立場、専門性が異なる。

用語の解釈が違う（例：N2レベルの日本語力）

●テンプレート記入の有効性

- ・ある程度自覚している課題を再認識できる。
- ・自分の立場と役割を確認できる。
- ・他者とのコミュニケーションツールとして有効だと感じない

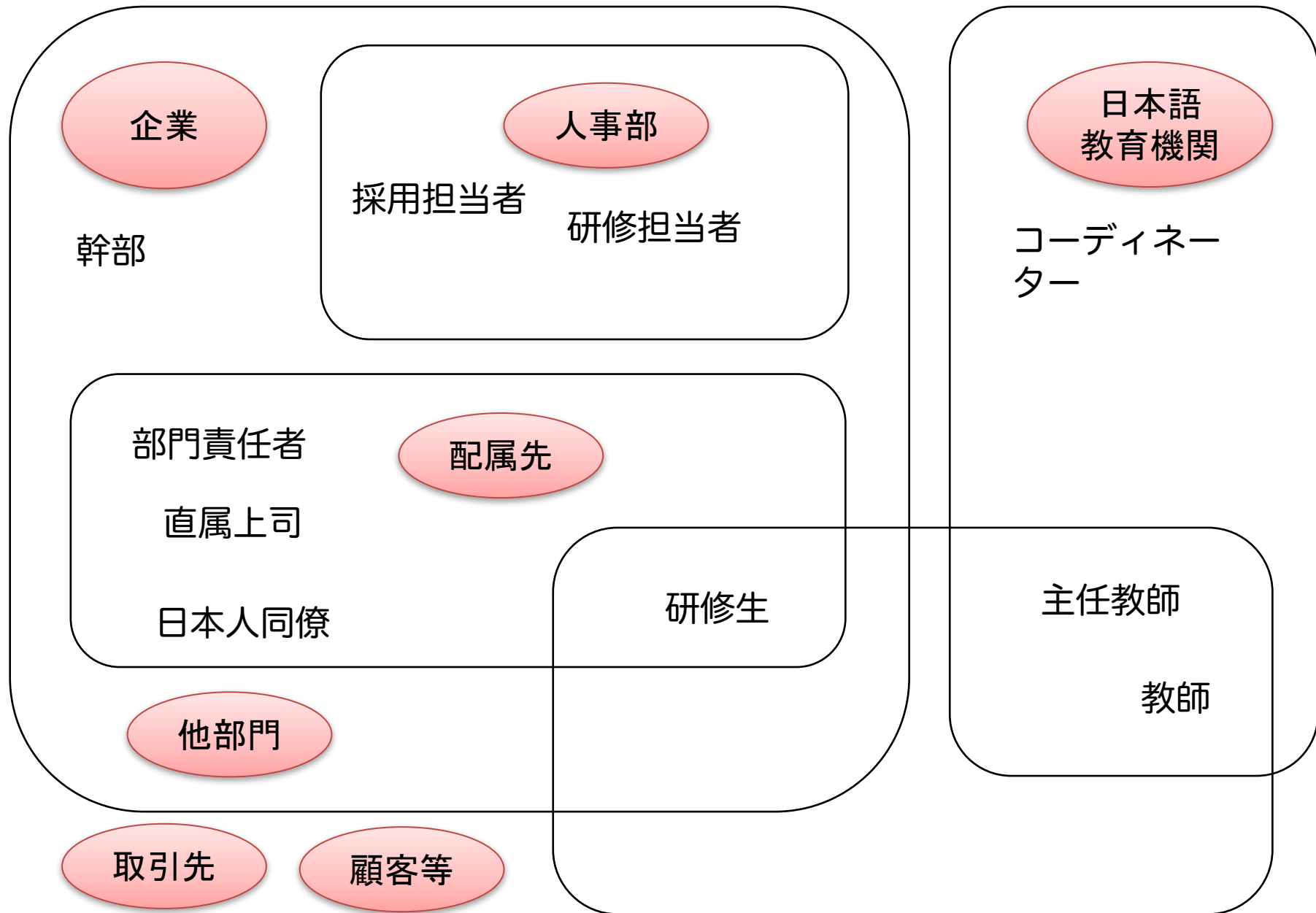
③テンプレートの活用方法、改善点の検討：

可視化テンプレートは、プログラムの全体像を記述するために十分な要素で構成されていると考える。しかし、他者とのコミュニケーションツールとするための改善が必要と考えられる。

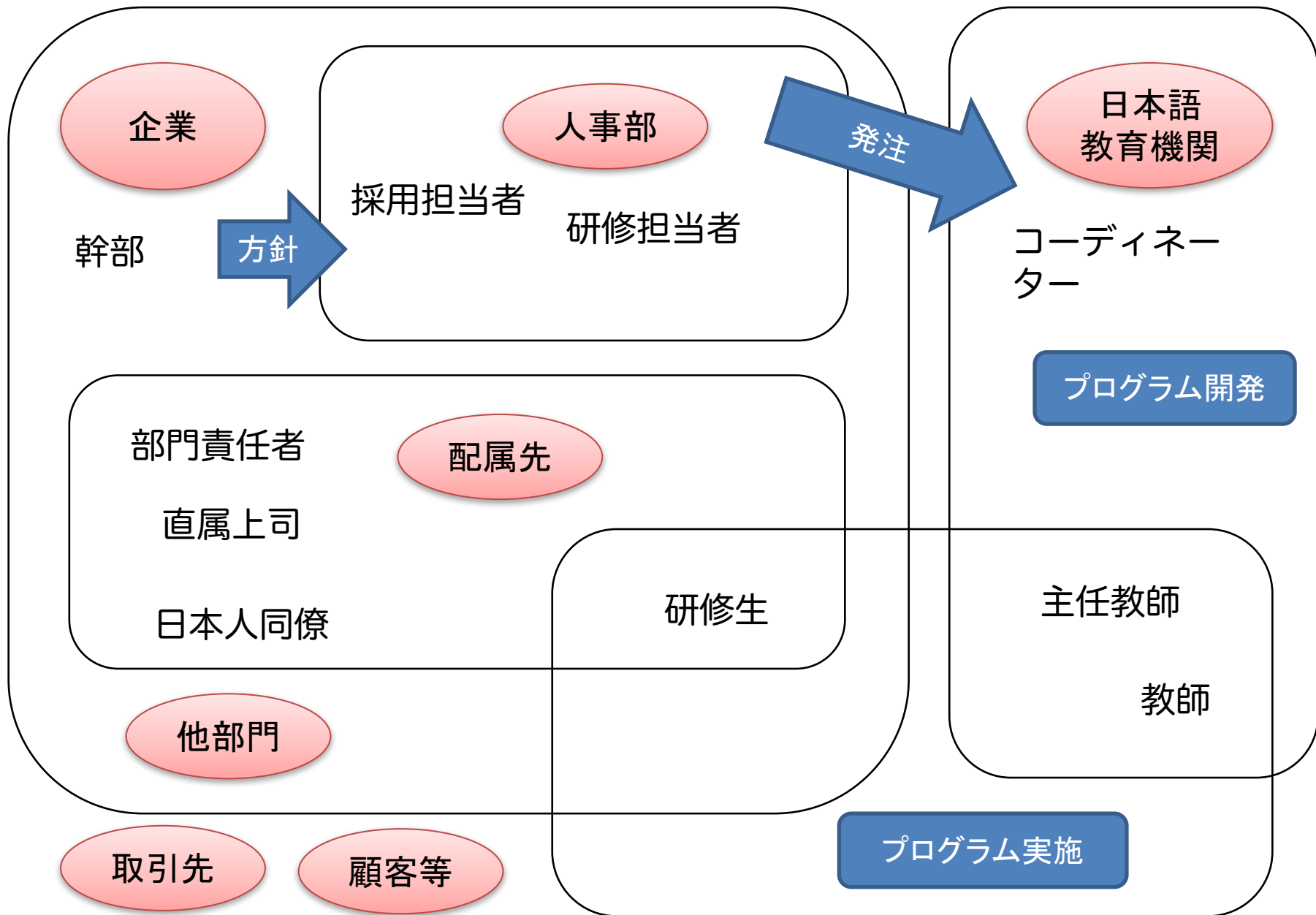
- ・ 課題の原因を探るために**可視化補助作業（作図等）**が必要ではないか。
例：ヒトの関係を図式化し、評価、判断の方法、方向を可視化する。
- ・ 関係者間で解釈の異なる用語、表現に留意する。記述からリストアップして検討してはどうか。

可視化補助作業（作図）の例

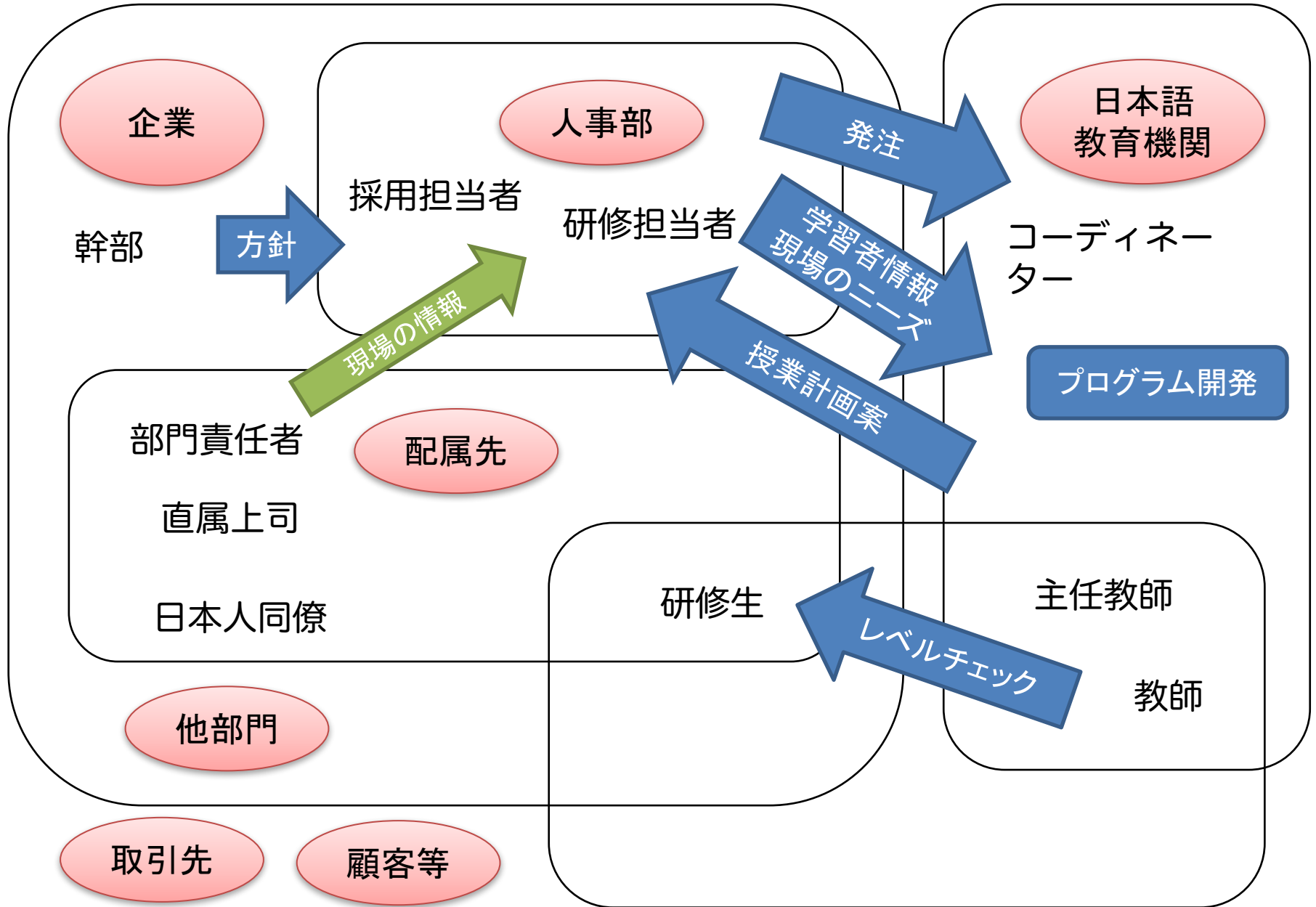
●ヒト（プログラムの関係者）



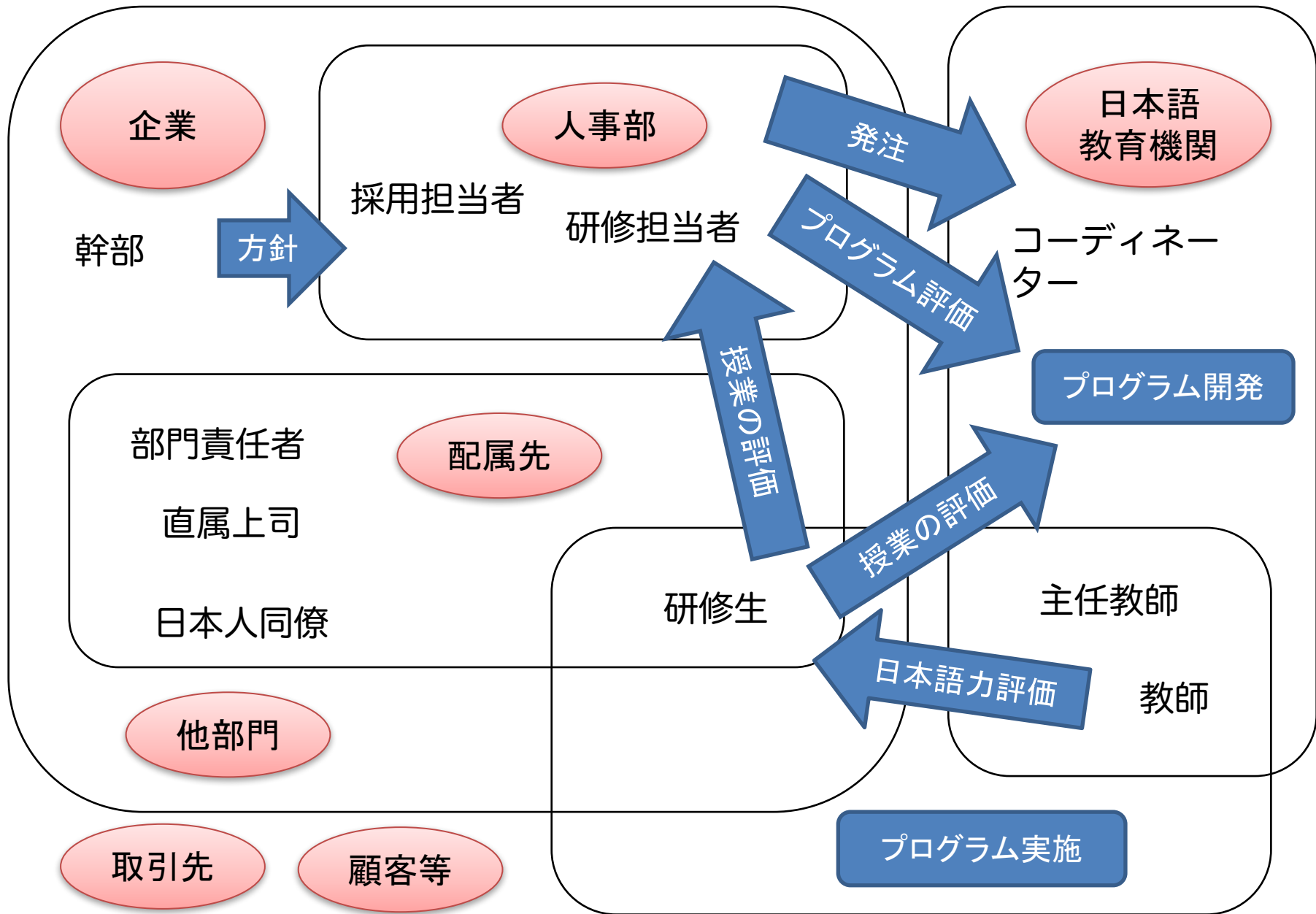
●発注と実施



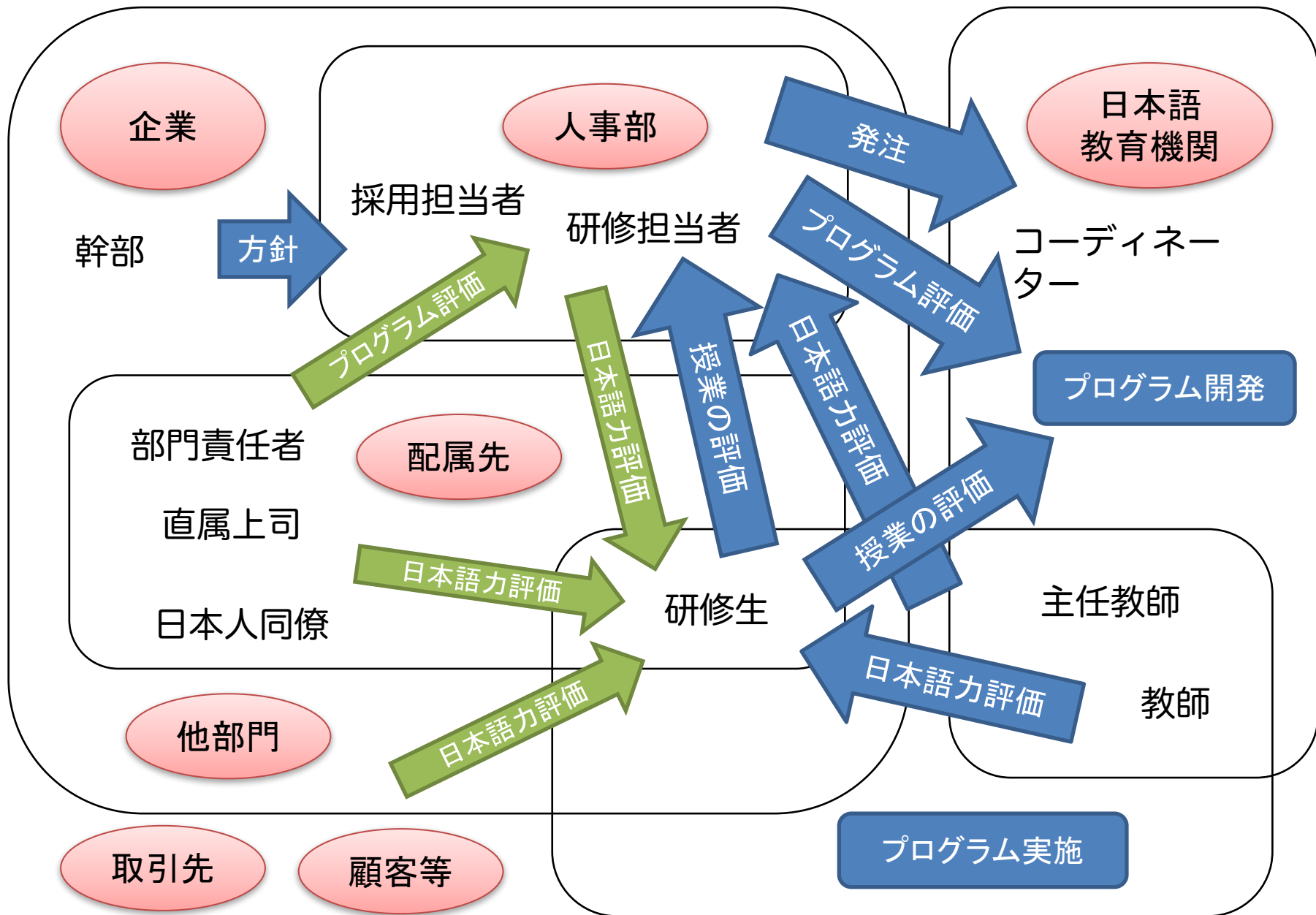
● 学習ニーズの把握とプログラム開発



●日本語力と授業の評価



●日本語力と授業の評価



●可視化補助作業から見えてきたことと解決案

- ・情報の伝達、共有ルートに、フォーマルなルートとインフォーマルなルートが存在する

⇒ インフォーマルなルートをフォーマル化することを企業に提案する

可視化補助図は、企業とのコミュニケーションツールとして活用できる

用語、表現の見直し

●人によって違う内容をイメージする可能性のある表現

- ・ 業務を遂行するための十分な日本語力
- ・ 学習目的に沿ったきめ細かい効果的な日本語教育
- ・ 各学習者により異なる（目標について）
- ・ 日本語での業務がスムーズに実施できるようになる
- ・ キャリアアップにつながる日本語
- ・ 上司、同僚に不快感を与えないビジネス場面での振る舞い
- ・ 遭遇する可能性のある場面

まとめ

提案 1

対話ツール、課題解決ツールとして活用するために、さらに1段階可視化プロセスを加える必要がある。

STEP1

可視化テンプレートにプログラムの構成要素に関する情報を詳しく記入する。

STEP2

対話ツールとなりうる可視化補助ツールを作成する。
このツールは認識の異なる関係者が問題の所在を概観できるように可視化するためのツールである。
この補助ツールは、可視化テンプレートへの記述を経て当事者の問題意識から、事例ごとに作成されるべきものである。

提案 2

関係者が共通に理解できる用語の定義、解説を行う必要がある。

STEP1

テンプレートの記入事例から、関係者間で解釈が異なる可能性のある用語、表現を抽出する。

STEP2

抽出された用語、表現を関係者間で共通に理解できるように必要な作業を行う。